

「プチ・帝國主義」論批判

——高橋龜吉氏の所論を駁す——

野呂榮太郎

一、問題の所在

高橋龜吉氏は、本誌四月號の巻頭を飾れる堂々三十餘頁の大論文に於て、所謂「日本資本主義の帝國主義的地位」に関する氏獨特の解剖を試みられてゐる。それは、慥かに、種々なる意味に於て、近來の最も注目し得る勞作の一つであると云ひ得るであらう。

そこには、高橋氏が、日本の資本主義に關して、最近數年間に亘つて發表せられたる、廣汎なる諸研究の成果が、最も透明に結晶せしめられ、最も總括的に展開せられてゐる。従つて、氏の所謂「日本資本主義行詰論」の認識、方法、論斷が、果して如何なる階級的立脚地から爲されつゝあるかに關しては、その最も集中的なる表現を、そこに見出し得るであらう。

加之、氏は、そこで、氏の從來の諸研究の包括的基礎の上に、眞に驚異に値する——だが、氏にあつては論理的必然の——論斷を下されてゐる。氏に據れば、

『日本の資本主義は、云ふ所の「帝國主義」の特徴を未だ殆んど備へてゐない状態である。』（「太陽」四月號、一八頁）

更に、『之を國際的に見る限り、日本は被搾取國であつて斷じて、搾取國ではない。被獨占國であつても決して「獨占國」ではない。被帝國主義國の仲間に入りこそすれ、決して、帝國主義的仲間に入らぬ地位ではない。』（同上、三三二頁）

『従つて、日本としては、その資本主義的生産品の販路のため、乃至は原料のために戦ふ「必然」よりも、寧ろ、「人口過剰

の捌口」のために戦ふ「必然」の方が、遙かに大であると云ふことになる。……従つて、こゝに、帝國主義戦争以外の戦争必然論が考へ得られる。而して……人口戦争は一の無産階級の解放戦としての色彩の深いものである。』（同上、三三二頁）

そこで、我が國の無産者階級を解放せんとせば、先づ、「専ら、英米佛等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戦」に行外に策はない。』（同上、三三三頁）

『蓋し、斯かる場合、大衆の解放は、單に自國資本家に由る搾取を取戻すことに懸る所よりも、外國に由る搾取を取戻すことに懸る所の分が、少くとも、目前より大であると云ふことになるからである。』（同上、三三三頁）

『果して、以上の事實にして間違ひなしとせば、日本の資本主義が「資本主義最後の發展階段としての帝國主義」をまで過程したことを基礎として編み出されたる、我國現在の左翼戦術は、その多くの點に於て、訂正を必要とするわけであること云ふ迄もないわけである。』（同上、三四頁）

と、言ふにある。

然らば、『我國現在の左翼戦術は、如何なる「多くの點に於て、訂正を必要とする」と言ふのか？ 高橋氏は、この點に關しては、何等積極的な見解を展開せらるゝことなく、單に、『記して、讀者諸君の御教示を俟ち、自らの蒙を啓き得ることが出来れば幸甚之れに過ぎない。』と、謙遜せられてゐるに過ぎない。

だが、『我が國現在の左翼戦術』の『多大の訂正を要求』せらるゝ、氏の論斷の根據、及び眞意は、蓋し、左の一連の道行きに於て見出し得らるゝものゝ如くである。即ち、曰く、

『従つて、日本としては、その資本主義的生産品の販路のため、乃至は原料のために戦ふ「必然」よりも、寧ろ、「人口過剰の捌口」のために戦ふ「必然」の方が、遙かに大であると云ふことになる。……

』こゝに、日本の無産階級運動が、支那に於けるそれと等しく、多かれ少かれ國民運動的色彩を免がれ得ざる根本原因がある。而して、この點は、レーニンの指摘せる如く、社會主義的に無産階級の解放を志す者の、決して侮蔑すべからざる點で

あつて、要は、之を「反動化」せしめず、之を導いて、眞の解放戦、即ち、反帝國主義運動にまで發展せしむることに在るわけだ。従つて、いま斯様な準備も出來ず、斯様な注意をも採らずして、萬一にも、その社會の秩序が混亂せんか、大衆は左翼理論の云ふが如き方向に進まずして、逆に、ファシスト化するに至るであらう。蓋し、斯る場合、大衆の解放は、單に自國資本家による搾取を取戻すことに懸る所よりも、外面に由る搾取を取戻すことに懸る所の分が、尠くとも、目前より大であると云ふことになるからである。』と。

かくて、高橋氏の排外主義は、三段論法式に完成された。氏が、特に「帝國主義國としての日本資本主義の地位は果して如何なるものであるか、と云ふ『問題の解決を必要とする理由』は、氏の認識、方法、論斷の階級の本質と共に、明瞭に看取せられ得る。

氏は、先づ第一に、日本資本主義を解剖し、その經濟的特質を指摘せられた後、『日本の資本主義は、云ふ所の「帝國主義」の特徴を未だ殆んど備へてゐない』従て、『日本經濟の性質から云つて云ふ所の帝國主義好戦論は生れない筈である。』（前掲書、二二頁）故に、『日本が「軍國的」でありとするならば、その「軍國的」の本質は「帝國主義的」ではなくて、「國民運動的」であると云ふ解釋に由つてのみ、謎は解かれる筈である』（前掲書、二二頁）と結論されてゐる。かくて、氏は、苟も、「三大強國の一」として自他共に許す日本帝國の資本主義的成熟をば、支那或ひはこれに準すべき後進國の列に加ふることによつて、今や支那のブルジョアにすら期待し得ない所の、「國民解放的、進歩的役割を、我がブルジョアに期待せんとせられるのだ。従て、氏は、今や漸く、我が資本主義も亦、「生産力發達の結果、人類は社會主義への推移か、それとも、植民地、獨占、特權、あらゆる國民的抑壓を以てする資本主義の人為的維持のための、大強國間の數年、或ひは數十年の戦が、そのいづれかに當面してゐる』（レーニン）の秋、敢て、深刻化しつゝある階級對立抗争の事實を拒否し、隠蔽し、更に、國民的迷信を鼓吹し、人種的僻見を激發することに依て、強いて、プロレタリアートの歴史的使命感への覺醒を阻止し、排外思想を注入し、以て、ブルジョアの反動政策を擁護せらるゝものである。こゝに、『三千年の日本歴史に光彩

を放つべく』生れた日本農民黨と共に、その顧問たる高橋龜吉氏の全使命はあるのだ。

第二に、氏によれば、『之を食料及び資源の獨占と云ふ立場から見れば、日本の如きは、プチ帝國主義國にも値しないのであつて、『更に又、之を「販路の獨占」と云ふ立場から見ると、……日本の占むる所は、文字通り猫額大の所であつて、英米佛露の占むる所と丸で御話しにならぬ。』（前掲、三〇頁）のみならず、『いま、日本は、最も「領土」の獨占到苦んでゐる國であり、消極的に搾取せられてゐる國である。』（前掲、三二頁）従つて、『今日、その人口問題の國際的解決策は、……専ら、英米佛等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戦」に行く外に策はない。』かくて、高橋氏の論法は、ブルジョアの公平の見地から見ると、日本の分け前が、英米佛等に比して少な過ぎるから、『英米佛等の領土の「獨占」を解放せしむる「解放戦」をやつて、『日本資本主義行詰』の有力なる原因たる食料及び原料の不足、販路の狹隘等の桎梏から「日本」を「解放」しやうと云ふのだ。これは、米國の、支那殊に滿洲に對する、「門戶解放」、「機會均等」の要求と、どこが異なるのだらう。一方は「過剰人口の捌口」の爲めに「解放」を要求し、他方は、「過剰資本の捌口」の爲めに「解放」を要求してゐるだけだ。かの如く、一方に於ける勢力の過剰と、他方に於ける資本の過剰と云ふが如き不均衡の同時的存在の事實こそ、資本主義の一般的傾向であり、就中資本主義的帝國主義の不可避的特徴である。而も、かゝる幾多の不均衡は、資本主義生産の發達と共に、國內的にも、國際的にも、因果的に、加速度的に激化せられつゝあるものにして、それ等の矛盾こそ、不可避的に、階級對立抗争の尖鋭化と、帝國主義列強間の獨占的勢力圏の再分割の爲めの闘争とに導かれざるを得ないものなのである。

然るに、高橋氏によれば、帝國主義戰爭の危機は、今や、「大帝國主義國の「現状維持」的平和論への轉向」と、「帝國主義候補國の侵略政策より解放政策への轉向」とに依る所謂「帝國主義列強間戰爭必然論の「唯物辯證法」的方向轉換」とかに由つて、既に『最早「眞理」ではな」くなつたのださうである。（社會科學、第三卷、第二號、高橋龜吉氏「末期に於ける帝國主義の變質」尙、氏によれば、「帝國主義候補國」——「プチ・帝國主義國」たる日本は、今や、「人口と領土との一大不均衡、こ

れを解決するために、資本主義的基礎においては、戦争以外に「解決方法がないのであるが、而も『人口問題を基因とする領土擴張戦争は、金融資本の発展のためにする戦争とは、その性質を全々異にするものであつて、寧ろ『國民戦争』の部類に屬するものと見らるべきである』(同上書、一四四頁)さうだ。だが、『人口と領土との間の一大不均衡』とは、實は、『資本主義の基礎においては』結局、労働と資本との間の不均衡——矛盾——の表現であり、従つて、それは、又、『一方に於て生産力の發達と資本集積との間の不均衡、他方に於て植民地の分割と金融資本の「勢力圏」との間の不均衡』を生ぜしめ、それを擴張再生産しつゝ、ある同一事實の異なる表現に外ならないと云ふ事に、氏は全然氣着かれぬものゝ如くである。かくて、氏の所論は、結局、帝國主義の讚美と扮飾とに墮してゐる。『自國の資本の特權のために戦ふこと、そして他國を掠奪する「權利」のための帝國主義闘争を民族的解放闘争と偽稱することによつて、國民または人民を迷はすこと——それはブルジョアジーのする事である。』(レーニン)

何は兎もあれ、氏は、以上二個の獨創的論斷を、大小前提として、三段論法式に結論を引き出されて、『我國現在の左翼戦術は、その多くの點に於て、訂正を必要とするわけであること云ふ迄もないわけである』と主張せらるるのである。だが、既に、氏の二前提が、以上一應分析を試みたるが如く、又更に、項を改めて究明する如く、全然誤れる認識に基く論斷たる以上、氏の『我國現在の左翼戦術』に對する訂正要求が全然的な外れであることも亦、氏の形式論理當然の歸結でなければならぬ。

のみならず、氏は、『我國現在の左翼戦術』の訂正を要求せらるゝ時、實は、未だ、眞實の『我國現在の左翼』を——執拗なる論理闘争に依て眞實の全無産階級的政治闘争主義の意識にまで昂められ、かくて我國に於ける運動の全體的展開を可能ならしめ、且つ必然ならしむべき、運動の主體的條件の一應の確立を完成したる所の左翼を——従つて、今や理論闘争に政治的曝露を重ね始めつゝ、最も廣汎なる全無産階級的政治闘争の現實的具體的必然的形態につき始めつゝある所の左翼を、毫も理解せられてゐないものゝ如くである。従つて、氏は、『いま斯様な準備も出來ず、斯様な注意も採らずして、萬一にも、

その社會の秩序が混亂せんか、大衆は左翼理論の云ふが如き方向に進まずして、逆に、ファシスト化するに至るであらう。』と、たわいもない忠言を寄せられてゐる。だが、『社會秩序が混亂』せる際に、『ファシスト化するに至るであらう』所のものは、『大衆』ではなくて、氏等の如き愛國的排外社會主義者か、日和見主義者だけであらう。勿論、『吾々は、プロレタリアーのどれほどの部分が、愛國社會主義者と日和見主義者とに従つてゐるか、また今後従ふかを算定することは出來ないのである。この問題を解決するものは闘争だけであり、社會主義××はそれに最後の決定を與へるであらう。』(レーニン)

以上、高橋氏が、特に、『帝國主義國としての日本資本主義の地位は果して如何なるものであるか、と云ふ』問題の解決を必要とする理由』と、それに對する氏の『解決』とを、一應批判することに依て、氏の認識——方法——論斷の階級的立脚地を明確にし得たこと、思ふ。

吾々は、進んで氏の日本資本主義の解剖そのもの、批判に入らねばならぬ。

二、『フチ・帝國主義』論の認識

(一)

高橋氏は曰はれる——

『いかにも、日本は、朝鮮、臺灣、南滿洲と云つた植民地を有してゐる。が、この侵略は必しも、今日左翼の云ふ所の「帝國主義」を意味しない。

『否、歐洲戦争中に於ける日本のシベリヤ出征すらも、この立場から云へば、帝國主義的色彩よりも、寧ろ、露國の復讐戦に備へんとした(それは見當外れであつたけれども)國家統一的色彩の方が大であつたと云ひ得る。なる程、歐洲に於ては、一八七一年に於て「國民戦争」は終結したかも知れないが、しかし日本から云へば、その戦ひの必要は、尙ほ最近まで存在してゐたことは、之を否み得ない。

『尤も、その後の日本に帝國主義國たらんとする野望あり、そのために努力もした、と云ふことは明かなことである。がしかし、それは要するに、日本が帝國主義國の「候補者」に立つたと云ふまで、あつて、現實に「帝國主義國」になつたことでは決してない。この點は混同すべきでない。』

『斯様なわけで、日本が果して帝國主義國であるか否かは、單に、日本が多少の領土を侵略してると云ふ點から見ると云ふ點から見るわけには行かない。それは、更に別の標準から検討されるべきである。』(前掲、六—八頁)と。

何と云ふ詭辯！ 何と云ふ血迷ひ！ 何と云ふ遁辭だ！

これが、「頭から反動的愛國主義を支持してゐるのでない」者の考へだらうか？

これが、「社會主義的に無産階級の解放を志す者の」解釋なのだらうか？

否、否、最も反動的なデマゴークと雖もかくの如くたわいもなき詭辯は弄さぬだらう。而も我が資本主義の研究に最も卓越した見解を有せらるゝ高橋氏にしてこの言あるは、その據つて來るところがなければならぬ。それは外でもない。それは、氏の所謂『プチ帝國主義國』のプチブルジョアが、所謂「唯物辯證法」的方向轉換とかに依つて、「左翼理論の云ふが如き方向には進まずして、逆に、ファシスト化するに至るであらう」過程に於ける、一の早發性症狀の結果であらう。

だが、既に、一應、氏の認識、方法、論斷の階級の本質を究明し得たる今、かの如きたわいもなき言葉の末に永くくだわることの煩ひを避けやう。そして、「日本が果して帝國主義國であるか否かは、高橋氏と共に、「更に別の標準から検討されるべきである。」

(二)

然らば、「別の標準」とは何か？ 氏は言はれる。

『その別の標準からの検討とは、日本資本主義の發展程度が、果して、云ふ所の「資本主義最後の階段としての帝國主義」

階段にまで發育してゐるかどうかと云ふ尺度ではかつて見ることである。而して、この「尺度」は即ち、レーニンの云ふ帝國主義の特徴である。』と。

かくて、氏は、レーニンの著『資本主義最後の段階としての帝國主義』の第七章『資本主義の特殊段階としての帝國主義』から帝國主義に關する定義を引用し、「帝國主義の最も重要な五つの特徴を」挙げられた後、「現に、歐洲の資本主義が崩壊に直面してゐるにも拘はらず、米國、南米、等に於ては資本主義が全盛を極めつゝある事實をどう説明するか。」(前掲、九頁)と云ふ問ひを發せらるゝ事に依つて資本主義、就中帝國主義の特質に關する無理解を表明せられ、かくて、「兎に角、日本の資本主義がいま、現に、帝國主義階段にまで發達したか否かと云ふことは、世界の資本主義が已に帝國主義的階段にあると云ふの一事に由つて決定されるべきでないことは明かであらう。」と解りきつたことに辻褄のあはぬ見榮を切られ、「そこで、日本の資本主義現在の發展階段そのものをレーニンの「尺度」に由つてはかつて見ることに」せられてゐる。

そこで、氏は、「日本資本主義の帝國主義的解剖」と題されながら、實は、「云ふ所の「資本主義最後の階段としての帝國主義」は、之をそのまま、日本資本主義に當、徹めることが出来るかどうか。」を、「レーニンの「尺度」に由つてはかつて見ることに」せらるゝのである。

次いで、氏の「型」式「當、徹め」が試みられる。こゝにも、氏の方法の根本的、致命的誤謬がある。

従つて、氏は、常に、日本資本主義の所謂「特殊性」を高唱せられながら、實は、全然、特殊性の認識に失敗してゐられる。これ、氏の「型」式主義の故に、「一般に定義の傳統的相對的意義を忘るゝことなく」と云ふレーニンの注意を無視された結果である。

更に、又、氏は、「レーニンの擧げた帝國主義の一ツツ」の特徴を切り離して考へずに、全體を綜合して判斷してもらひた「い」と言はれながら、氏の「當、徹め」主義の故に、具體的分析の缺如の故に、單なる現象の專斷的なる蒐集雜列の故に、毫も全體性的理解に到達せられてゐない。従つて、「綜合しての結論を導き出さ」れた結果は、全く專斷的、獨斷的なるものと

ならざるを得なかつたのである。

其他、氏の解剖ならざる「解剖」の方法の誤謬を指摘すれば際限がないが、氏の一般方法の批判は、一應、これに止めて、いよく「日本資本主義の帝國主義的解剖」そのもの、批判に移らう。

三、『フチ・帝國主義』論批判

(一)

氏は、先づ、「生産及び資本の集積が、非常に高き程度に達し、經濟生活を決定する獨占の生じたこと」と云ふ現象があるか否かを、見らるゝ爲めに、農業を例にとられる。そして、「國民生産の過半を占むる（その労働量から云つて）農産品は周知の如き小農制、小規模制であつて、こゝには殆んど大規模生産と云ふことはない。この點……日本は英米獨等の帝國主義國と先づ著しく事情を異にしてゐる（前掲、九一〇頁）と斷ぜられてゐる。

隨かに、日本の農業は、英米獨等のそれに比して、小規模制であり、機械使用の程度も著しく劣つてゐる。だが、生産及び資本の集積程度を見るために、農業を例にとるなどは、資本主義經濟の特質の何たるかを知らざるものゝなすことである。のみならず、我が國の農業が著しく小規模であり、従つて最初から比較的高度の生産様式を探れる工業と著しき不均衡をなし、而も我が工業の急速なる發達に依り彌々その不均衡を増大し、激化せるの事實こそ、後進なる我が資本主義をして急速に帝國主義の段階に迄成熟せしめたる最も有力なる一要因であり、これこそ、我が資本主義發達の一特殊性なのである。

レーニン曰く、「その大資本の獨占は、民衆の大多數が飽くまで飢えて居り、農業の全發展が工業より遙かに遅れて居り、工業そのものゝ内部においては、重工業が凡ての他の部門を犠牲としてゐるといふ關係の下において、實現するものである。」（レーニン著作集、第二卷、三七頁）而して、「資本主義一般にとつて特徴的であるところの、農業の發展と工業の發展との不均衡は、悪化するばかりである。」（同上、二三頁）と。

尙、氏は「農業未だその國生産の過半を占むる」と言はれてゐるが、これは虚構である。高橋氏自身が編纂せられた『日本經濟の解剖』の『附録統計表』第十三によれば、我が農業生産高は、大正十二年に、總額三十四億二千四十萬九千圓であるが、『工場統計表』に據れば、工業生産額——（而も五人以上の職工を使用する工場工業だけの）——は、同年に、五十九億七千八百四十四萬五千圓である。因に言ふ、世界大戰直前の大正三年には農業生産額の十四億百二十一萬九千圓に對して、工場工業生産額は十三億七千六百八十萬八千圓に過ぎなかつたのである。何と農業の發展と工業の發展との不均衡の迅速に激化せることよ！ 何と工業生産の集積の加速度的なることよ！

尙、この際、高橋氏は「國民生産の過半を占むる（その勞力量から云つて）農産品」と言つた際に、（その勞力量から云つて）と但書きがしてあると言はれるかも知れない。だが、前後の關係上、この但書きは無意義である。のみならず、『勞力量』を云々される際に労働の生産力を全然眼中に置いて居ないことが解る。従つて、労働の生産力を考慮に入れた『勞力量』の意なら、農業のそれは工業より遙に小である。更に、農業人口が總人口の過半数を占むると云ふ意味なら、『民衆の大多數が飽くまで飢えて居る』と云ふ『大資本の獨占』に有利な條件を提供してゐると云ふことになり、我が國には未だ經濟生活を決定する獨占が生じないし、又生じ得ないと云はれる氏の見解に不利な反證を提供することになる。以て如何とせらるゝ？ 『次に、農業以外の生産についての集積状態如何であるが、この點については、遺憾ながら、之を具體的に比較する材料が出來てゐない。』と、云はれて、氏は、この最も重要な方面に於て、充分なる解剖の勞をとられることを回避してゐられる。而も、漫然「斯様なわけで、我が生産の集積及獨占は、なる程、過去に比せば著しく進んでゐるが、しかし、之を英米獨等のそれに比較すれば殆んど云ふに足らないと云つてよい。』と、獨斷せられてゐる。

果して、『我が生産の集積及獨占は、……之を英米獨等のそれに比較すれば殆んど云ふに足らないと云つてよい。』だらうか？ 數字を擧げて御示し、やう。

先づ、世界中で最も生産の集積集中してゐる米國と比較して見やう。米國の統計は少し古いが、同様に、日本のも同じだ

け古くするから同じ事だ。米國のは、"abstract of the census of the manufactures", 1914 に據り、日本のは「工場統計表」に據る。百人以上の職工を使用する大規模經營だけに就いて、總數中に占むる百分比を出して比較する。

A 經營規模別に依る工場數(百分率)

米	1909年	4.1%	500人以上	0.5%	千人以上
	1914年	4.2%	500人未満	0.5%	千人未満
日	明治四十二年(1909)	3.0%	500人以上	0.25%	千人以上
	大正三年(1914)	3.6%	500人未満	0.39%	千人未満
	大正八年(1919)	4.3%	500人以上	0.45%	千人以上
	大正十二年(1923)	3.9%	500人未満	0.55%	千人未満

B 經營規模別に依る職工數(百分率)

米	1909年	34.2%	500人以上	12.7%	15.3%
	1914年	34.1%	500人未満	13.2%	17.8%
日	1909年	22.6%	500人以上	7.0%	13.9%
	1914年	22.9%	500人未満	8.7%	17.0%
	1919年	23.5%	500人以上	9.3%	22.2%
	1923年	20.8%	500人未満	10.4%	28.3%

官業を含んでないから、これを含めれば比率は更に大となり米を凌駕する——、にも拘はらず、百人以上五百人未満に於

活眼を開いて、右の兩表を見ていた。氏が「その性質上「生産の集積及獨占」に餘り適せないもの」とせらるるものから多く成つてゐる所の我が工業の集積及獨占の程度が、世界大戰以降の飛躍的發展及び集中を遂げざる以前に於て、既に、米國と同程度の「獨占」に達してゐたのである。而も「後進國」と云ふひげめを感じなくてもよい様に同一年度を取つたのに、これでも、氏は「我が生産の集積及獨占は……之を英米獨等のそれに比較すれば殆んど云ふに足らない」と言はれるのであるか？ これでも、氏は、我が國の「生産及び資本の集積が、非常に高き程度に達し、經濟生活を決定する獨占」が生じてゐないし、また生ずるに「餘り適せない」と云はれるのであるか？

序に、注意すべきは、日米を職工數に就いて對比して見るに、我が國は、千人以上を使用する巨大工業に於ては、米の一九〇九年、二二・六%、一九一四年、二二・九%、一九一九年、二二・五%に對し、一七・八%に對し、一七・〇%を占め遜色がない——實は、一七・八%に對し、一七・〇%を占め遜色がない——實は、一九二三年以前の統計には我が國に於て特に巨大工業を有する

ては約一一%、五百人以上千人未満に於ては約四・五%だけ、夫々米國よりも少いと云ふこと、従つて、略ほそれだけ、百人以下の小經營の割合が米國よりも大であると云ふ事實である。この事實は、我が國に於ける巨大經營の獨占的地位を益々絶對的のものたらしむる所以であり、獨占化の過程が、比較的に入目につかぬ様に、而も加速度的に進行せる所以である。

蓋し、「小經營と大經營との競争、技術的に遅れた經營と進んだ經營との競争は問題とならぬ。獨占と、その壓迫と、その暴壓から脱しやうとする凡てのものは、獨占到依て絞殺される」(レーニン、前掲、二〇頁)からである。更に、資本の集中状態を見るに、大正十二年度に於て、社數一七、五一六、拂込資本金八、八五一、六九二千圓中、資本金一千万圓以上を擁する大株式會社數は二七五、その拂込資本金は四、五四九、九一二千圓であつた。即ち、社數に於て、僅かに全體の一・五七%を占むるに過ぎぬ大會社が、實に、全株式拂込資本金の五一・四〇%を、即ち過半を支配してゐるのである。

尙、氏は、「事實、生産の集積及獨占到最も適してゐる産業は重工業乃至化學工業品であるが、これ等の産業は我國に於ては殆んど云ふに足りない位地のものである」(前掲、一〇頁)と、言はれてゐるが、これまた、分析の不充分に基くものである。大正十二年度末に於ける會社資本總額一五、五六七、七八七千圓中、工業會社資本は六、〇七五、四九二千圓、即ち總資本の三九・二四%を占めてゐる。所で、その中、機械器具製造工業、金屬工業、電氣瓦斯業、及び化學工業の資本合計は三、五二〇、四九八千圓、即ち總資本の二二・五九%、従つて、工業資本合計の過半を占めてゐる。のみならず、礦業資本の九六九、八六六千圓(六・二六%)、運輸業資本の一、四五六、八五七千圓(九・三五%)も亦、廣義の重工業(Schwerindustrie)に屬すべきものである、之等を合算する時は總額五、九四七、二二二千圓、即ち總資本中の三八・二〇%を占めてゐる。之に對して、氏の所謂「生産の集積及獨占到」に餘り適せない「纖維工業を始めとして食料品工業、其他爾餘一切の雜工業の資本は全體の一六・六五%を占むるに過ぎない。尙、こゝに附言すべきは、氏は、「纖維工業は……その性質上「生産の集積及獨占」に餘り適せないもの」であると云はれてゐるが、これは、明かに、「森を見ずして個々の樹を數へてゐることを證明す

るものに外ならず、それは、外觀、偶然事、混沌を奴隸的に複製するに過ぎず、その観察者が、材料のために窒息して、意義ある所を見失つた人間であることを語つてゐる(レーニン)ものと言ふべきである。問題は、纖維工業が——一般に所謂輕工業が——「生産の集積及獨占」に餘り適せぬ、か適するかにあるのではない。纖維工業始め一般に輕工業は、その生産の性質上、他の重工業に比して、その資本の有機的構成が、一般に低度であり、且つその高度化の速度は比較的緩慢であり、従つて、利潤率低下の傾向が比較的緩慢であるため、「生産の集積及び獨占」への衝動——即ち、獨占利潤への衝動——が、比較的強くないと云ふに過ぎぬ。のみならず、その際、輕工業就中纖維工業發達の歴史的條件を考慮に入れねばならぬ。と云ふのは、一般に、就中、歐米に於ては、輕工業の發達は重工業に先行したと云ふこと、従つて、上述の生産の性質——不變資本就中固定不變資本が相對的に少なくてすむと云ふ——にも條件づけられて、多くは個人經營又は合資組織に依つて經營され、且つその傳統が今尙歐米、就中西歐には残つて居り、爲めに株式組織に比して利潤率低下の苦痛を受くることが少ないと云ふことである。蓋し、一般に平均利率は、平均利潤率よりも、平均配當率よりも小であるからである。更に、之等の二條件は、一方販路の性質にも條件づけられると共に、他方主として鑛工業に原料を仰ぐ重工業に比して原料獨占の制約を受くること少なきに幸され、かくて、輕工業は、一般的には、獨占への衝動が重工業に比して相對的に緊切でないことなるのである。

だが、以上は飽くまで「一般的に」である。ところで、我が國の場合は如何と云ふに、先づ、日本が後進資本主義國であり、殊に永き封建的鎖國の爲めに、商業資本の發達が、従つて資本の個人的蓄積が不充分であつたと云ふことのために、上述の歴史的條件は、日本の場合にはあてはまらない。即ち個人資本の蓄積の不充分と、既に完全に成熟した外國の同種工業と、初めから殆んど無防備状態で對戦する爲めに相當大規模でなければならなかつたといふ事との爲めに、當時既に一般化してゐた會社組織、就中株式會社組織の下に大工場制を初めから採用しなければならなかつたのである。従つて、巨額の機械設備を外國から輸入せねばならず、更に原料もやがて海外に仰がねばならなかつた。爲めに、我が國の輕工業、就中、綿

絲紡織、麻絲紡織、羊毛紡織、精粉、精糖、麥酒醸造等は、初めから高度の資本構成を有し、従つて、利潤率低下の桎梏を受けること大であり、ために、「生産の集積及獨占」への衝動が、甚く大であつたのである。これ、早くも、明治十三年には製紙聯合會の、明治十五年には紡績聯合會の設立を見たを始めて、明治四十一年には精糖會社生産制限及精糖會社共同販賣所の組織、同四十三年には臺灣糖業聯合會の成立、同四十年に於ける人造肥料聯合會の組織、同四十一年の人造肥料販賣株式會社の設置、同四十九年に於ける大日本麥酒株式會社(トラスト、全醸造高の七割五分)の成立、同三十六年に於ける日本製麻株式會社(全生産高の八割五分)の設立等々を見るに至りし所以である。

次に、氏は、我が工業のカルテル化、トラスト化、獨占化の傾向に就いて、未だ「經濟生活を決定すを獨占を生じ」る程度にまで發展してゐない。『更にまた、我國の經濟生活上餘り重要な産業に於て、生産が殆んど獨占到まで集積せられてゐる事實がないではない。例へば製麻事業、板ガラス事業、染料事業、等である。が、これは要するにその産業が微弱であるが故に「獨占」になつたものであつて「帝國主義的獨占」とは少し性質を異にする。』と、例に依つて、辻褃の合はぬ詭辯を弄してゐられる。製麻業や、板ガラス業や、染料業が、何故に「我國の經濟生活上餘り重要な産業」なのだ。殊に染料業の如きは、氏が「我が産業の大部分」を占めるとまで過重評價されてゐる纖維工業の發達に決定的な意義をもつてゐるではないか? 歐洲大戦中獨逸からの染料輸入が全く杜絶して仕舞つた時の事を想起せらるゝがよい。

だが、詭辯と虚構とに對しては、更に包括的な事實を具體的に示すのが早道である。(1)石炭鑛業聯合會、(2)銑鐵共同組合、(3)製鋼懇話會、(4)電氣鋼共同販賣所、(5)日本セメント聯合會、(6)曹達晒粉同業會、(7)晒粉聯合會、(8)過燐酸同業會、(9)共同洋紙株式會社、(10)バルブ共同會社、(11)日本板紙同業會、(12)糖業聯合會、(13)酒精協定、(14)製粉聯合會、(15)銜罐詰共同販賣會社、(16)大日本紡績聯合會、(17)羊毛工業會、(18)蠶絲業同業組合中央會第三部等々は何れも當該工業中の主要なるもの、殆んど大部分乃至全部を包含する獨占カルテルであつて、一二の例外はあるが、大體完全に市場を獨占的に支配してゐるのである。

更に、日本石油株式會社、大日本麥酒株式會社、帝國製麻株式會社等は何れも幾多の同業會社を合併買収したる結果、現

在何れも總産額の七割以上を占むることに依つて殆んど市場を獨占的に支配してゐる大トラストである。

次に、海運業に於ける日本郵船及び大阪商船は何れも幾多の同業會社の合併と傍系會社の從屬とに依つて海運界を略二分し、電氣業に於ける東京電燈、大同電力、東邦電力、宇治川電氣、日本電力の五大會社亦幾多の合併と傍系會社の從屬とにより夫々獨占的地位を確立しつゝある。勿論電氣業界に於ける之等の大トラスト會社間の競争は未だ混沌を極めつゝあるが、而も時に東電、大同、東邦及東京電力（東邦の分身）等の合同が策され、時に東電と日本電力、宇治川電氣等の電力國有運動となる等、今や國有鐵道電化計畫と共に電力國有は漸く具體化しつゝある。而もこの過程に於て金融資本の電力支配は著々と進められてゐるのである。最近に於ける東電に對する所謂御三家（三井、三菱、安田）の共同支配權の増大の如きその一著例である。

其他、瓦斯、水道等は勿論一般國民の日常生活に最も關係深き交通機關就中軌道の如きは、何れも各種の業法に依り地方的に獨占化されてゐる。

最後に、看過すべからざるは、國營事業である。煙草、鹽、樟腦等の日用品から、郵便電信及電話、並に鐵道等國民の日常生活に最も密接なる關係のあるもの、多くが國家の獨占經營になつてゐる。其他軍事關係の工業も殆んど國營であること周知の如くである。で、之等國營事業に投ぜられてゐる資本を合算すると優に三十億圓を突破し、民間の工礦業及び運輸業に投ぜられた資本總額の六割餘に當る。これだけの資本は、既に、少くとも獨占の最高形態を取つてゐるのだ。

以上、私は、餘りに永く生産及び資本の集積及び獨占化の事業について解剖を試み過ぎた。従つて、如上の幾多の獨占的横斷カルテル又はトラスト等は、事實上、三井、三菱、住友、安田等十指に満たざる少數の大縱斷的財閥トラストの獨占分割的支配網の中へ織り込まれてゐるのだと云ふ周知の事實に就いては、これ以上論及しない事にしよう。

否、これ迄の分析すら、經濟界の實狀に通ぜらるゝ高橋氏に對しては、寧ろ釋迦に説法の觀があるかも知れぬ。だが、それにも拘はらず、『森を見ずして樹を數へる』氏の認識に對する爲めには、そして又今後の批判の進行を促進する爲めにも、

!! 版 出 的 民 國 太 陽 增 刊

明治大正の外交	法學博士 松原
彌助砲時代から	陸軍大佐 櫻井 忠 溫
海軍六十年史	海軍中將 日 高 謹 爾
明治大正日本海運史	經濟學博士 寺 島 成 信
明治大正航空略史	陸軍中將 長 岡 外 史
明治大正の農業	農學博士 横 井 時 敬
建築界の變遷	工學博士 佐 藤 功 一
明治大正時代の文學	理學博士 千 葉 龜 雄
明治大正本邦科學界の瞥見	文學博士 渡 邊 萬 次 郎
明治大正の教育	文學博士 吉 田 熊 次
明治大正の哲學	文學博士 金 子 筑 水

— 裏 面 を 見 よ —

太陽增刊 明治大正の文化

博文館創業四十周年記念

維新開國以來我が國運は、世界史上に殆んど類例のない奇蹟的進展をとげた。その政治的、軍事的、經濟的、文化的發展の過程は、まさに順風に帆をあぐるの趣きがあつた。かくて、歐洲大戦による列國の均勢の攪亂と共に、今や我國は、有色人種中唯一の強國として英米兩國と鼎立するの地位を確實に把握するに至つた。

だが、最近に於ける世界的社會不安、經濟及び財界の空前の混亂、産業の慢性的萎縮、支配階級の腐敗と階級戦の激化、世界に漲る反帝國主義運動の狂瀾、これ等の諸事實は、我國民を有頂天な自己陶醉からよびさまして、嚴肅なる現實の前に自己を反省せしむるに十分であつた。吾等は先づ吾等自身を知らねばならぬ！この叫びは近時吾が國の各階級層から痛切な要求として叫びはじめられた。

弊誌が創業四十周年記念増刊として「明治大正の文化」を特輯した趣旨は、この澎湃たる國民的要望にこたへるためである。今や昭和改元人心新たなる時、しづかに開國六十年間の吾が文化發展のあとを省察するには絶好の時期である。吾等は、永世に傳ふべき國民的記念品として自信をもつて本誌を讀者諸賢の座右にすゝめる。乞ふ御愛讀を賜へ。

内容目次豫告

明治大正時代の歴史的地位	文學博士	村川堅固
明治大正財政史	經濟學博士	太田正孝
明治大正經濟盛衰史	高橋龜吉	
明治大正の政治運動と其壓迫法	法學博士	清瀨一郎
明治大正銀行發達史	子爵	澁澤榮一
明治大正の外交	法學博士	松原一雄
彌助砲時代から	陸軍大佐	櫻井忠溫
海軍六十年史	海軍中將	日高謹爾
明治大正日本海運史	經濟學博士	寺島成信
明治大正航空略史	陸軍中將	長岡外史
明治大正の農業	農學博士	横井時敬
建築界の變遷	工學博士	佐藤功一
明治大正時代の文學	理學博士	千葉龜雄
明治大正本邦科學界の瞥見	文學博士	渡邊萬次郎
明治大正の教育	文學博士	吉田熊次
明治大正の哲學	文學博士	金子筑水

!!版出的民國まへす念記に世永

!!よ見を觸顔的倒壓の者筆執と璧完の容内

明治大正六十年間の宗教界を顧みて	青山學院教授	比屋根安定
國語國字問題略史	長谷川天溪	
明治大正の美術	黒田精一	
明治大正の日本畫	瀧井犀水	
明治大正の洋畫	坂井村	
明治大正翻譯文學の概観	木邊孝次	
明治大正の彫刻	田邊尚雄	
明治より大正への音楽界	伊原青々園	
歌舞伎芝居の變遷	伊原青々園	
近代劇勃興史	小山内薫	
我國新聞雜誌發達の概観	小野秀三	
明治大正の風俗大からくり	齋藤佳三	
明治大正映畫史	森岩雄	
明治大正の民謡	藤澤衛彦	
交通機關の今昔	山本直太郎	
挿畫に現れたる明治大正時代相	菅原教造	
明治大正漫畫の推移	細木原青起	
明治の一大疑獄	尾佐竹猛	
明治より大正に亘る婦人運動史	奥むめを	
勞働組合發達史	赤松克麿	
社會主義運動小史	山川均	
明治大正の政界に於ける三井系と三菱系	白柳秀湖	
明治大正の人物	三宅雪嶺	
明治大正美人傳	長谷川時雨	
明治大正名人列傳	料治朝鳴	
明治から大正へのスポーツ	橋戸信	
のぞきからくりの思ひ出	水島爾保	
明治維新と地方制度	小野武夫	
明治初期の少年雜誌	小酒井不木	
明治初年に於ける百姓一揆	石井研堂	
明治初年の女學生	藤井甚太郎	
紅葉館時代	鳩山春子	
鹿鳴館時代の回顧	長谷川時雨	
明治維新の思ひ出	大倉喜八郎	
赤旗事件の思ひ出	石川千代松	
米騒動見聞記	堺利彦	
青踏社時代の思出	鈴木茂三郎	
明治より大正への日本國勢の膨張	平塚明子	
漫畫明治大正史	岡本一平	
過去を顧みて	内田魯庵	

六月十五日發賣

定價 貳圓(送料六錢)
特製 參圓(書留送料拾八錢)

!!よ見を觸顔的倒壓

明治大正名人列傳	橋戸信
のぞきからくりの思ひ出	水島爾保
明治維新と地方制度	小野武夫
明治初年の醫學	小酒井不木
明治初年の少年雜誌	石井研堂
明治初年に於ける百姓一揆	藤井甚太郎
明治初年の女學生	鳩山春子
紅葉館時代	長谷川時雨
鹿鳴館時代の回顧	大倉喜八郎
明治維新の思ひ出	石川千代松
赤旗事件の思ひ出	堺利彦
米騒動見聞記	鈴木茂三郎
青踏社時代の思出	平塚明子
明治より大正への日本國勢の膨張	林 柁木
漫畫明治大正史	岡本一平
過去を顧みて	内田魯庵

六月十五日發賣

定價 貳圓(送料六錢)
特製 參圓(書留送料拾八錢)

一應必要な過程であつたのである。

「兎に角、以上に由つて、」氏に借問したい。氏は、尙、「日本資本主義の現在の生産状態が、生産の集積が、非常に、高き程度に達し、經濟生活を決定する、獨占を生じる」程度にまで發展してゐないことは明かであらう。」と、言はれるのであるか? 氏の所謂「生産が殆んど獨占到まで集積せられてゐる事實がないではない。」のは、果して、單に、「我國の經濟生活上餘り重要ならざる産業に於て」だけであらうか?

「日本の資本主義は未だ漸く、プチ帝國主義階段にまで達したか、達しないかの階段にまで漸く到達してゐるに過ぎない」か否かを、もう一度「全體を綜合して判斷してもらひたい。」

(11)

第二に、氏は言はれる、「之に由ると、金融資本は、生産の集積と、それから生れた獨占、といふ土臺の上に、銀行と産業が融合又は合生したものでなくてはならない。斯様な意味に於ける銀行資本の産業支配と云ふものは、尙ほ更ら我國には未だ殆んど存在しないと云つてよい。」と。そして、氏は更に續けて言はれる。

「なる程、銀行の集中と云ふことはある。金融寡頭政治は少からぬ程度にまで進みつゝある。而して「財閥政治」は現に大なる力を振つてゐる。しかし、それは、所謂「金融資本を基礎としての」それではなくて、それとは別な力を基礎にしたものである。」と。

如何にも、歴史を逆轉しやうとする反動的愛國主義者でなければ、考へ及びさうもないことだ。

一體「金融資本を基礎とし」ない「金融寡頭政治」とは、どんなものだ? 能く、そんな鵠的な政治が、「少からぬ程度にまで進みつゝあ」り得るものだ! 如何に無産階級を基礎としない無産者政黨が存在し得る世の中とは云へ。

それから、一體、「少からぬ程度にまで進みつゝある」金融寡頭政治」と「現に大なる力を振つてゐる」財閥政治」との間

に、如何なる本質上の相違があるのか？ 御教示が願ひ度い。但し、御聴きしたいのは、字句の相違ではない。『金融寡頭政治』の基礎としての『別な力』と『財閥政治』の基礎としての『別な力』との正體であり、その本質上の差異である。

『生産の集積、それから来る獨占、が、既に、『我國經濟の現今の特色と云ふ程度にまで發達して』るか否かは、前節に於て究明した所である。従つて、殘る問題は、かゝる集積及び獨占化の過程に於て、銀行と産業の融合又は合生が行はれたか、又行はれつゝあるかを究明すれば足る。

尙、その前に指摘しなければならぬ事は、氏は、レーニンの『生産の集積、それから生れて来る獨占、銀行と産業の融合又は合生——それが、金融資本の發達史であり、その觀念の内容である』と云ふ一句を引用した後『之に由ると、金融資本は、生産の集積と、それから生れた獨占、と云ふ土臺の上に、銀行と産業が融合又は合生したものでなくてはならない。』（一三頁、傍點筆者）と云ふ風にバラフレーズされてゐるが、かくて、全然レーニンの言葉を片輪にし、無内容にし、非辯證法的なものにして仕舞つてゐると云ふことである。これは、俗學主義者の通弊であるが、就中、高橋氏に於ては、氏の論者の到る處に見る所であり、従つて氏の論證を批判するに際して一々引文と氏のそれに依つて論證されやうとすることゝの間の内容のくひちがひを指摘するの勞を餘儀なくされる所である。今批判の對象としてゐる論文に引用されてゐるレーニンやプロピッチの見解に對しても氏は殆んど凡ての場合に於て曲解してゐられる。尤も、レーニンは、『彼等がマルクスの名を利用するのを禁止出来ないのは、商店が任意の商標や、任意の看板や、任意の廣告するのを咎めることが出来ないのと同じだ。被壓迫階級の間に入氣のある革命的指導者の名が、死後において、被壓迫階級を購着するために、敵によつて占有されるのは、今までの歴史のつねであつた。』と云つてゐるから、レーニンも今日、日本の愛國社會主義者に依つて自身の名が看板に利用されるであらうことも豫め覺悟してはゐたらうが、何は兎もあれ、氏は、レーニンの言葉をバラフレーズするに際して、『……獨占』と『銀行と……』の間に、『と云ふ土臺の上に』と云ふ句を入られる事に依つて『獨占』が成立して後始めて『銀行と産業の融合又は合生』が起ると云ふ風に、一方的に、段階的に、理解されてゐる。これでは、複雑な社會現象が解剖出来るものでない。

これに關連して、もう一つ指摘しなければならぬのは、氏は、我が國の銀行就中普通銀行に對して全然公式的理解に止つてゐられることである。氏は、『普通銀行運用資金株式放資高調』なる表を掲げて、『……銀行資本が産業資本化した高は（それは大體に銀行の株券所有高以外にはない筈である）……』と云つてゐられる。

だが、『ない筈である』べきものがあるのだから不思議だ。普通銀行——商業銀行——と云ふから、商業手形の割引や商業資本の融通だけをしてゐるものと思つたら間違ひである。普通銀行の貸出の中の六割乃至八割は所謂長期貸——その多くは産業の企業への投資である所の——であると云ふ事は、少しく我が金融界の實狀に通ずるものゝ等しく知る所である。即ち我が普通銀行は制度の上では商業銀行であるが、實質に於ては産業銀行なのである。そしてこれはまた、後進なる我が國資本主義の發達の特殊性から云つて、又資本主義發達の必然の過程から云つて、當然の事である。即ち、前節に於て一應論及した所の我が資本主義發達の歴史的條件は、強くこゝにも影響してゐるのである。

商業資本の發達が不十分であり、商業資本の發達と産業資本の發達とが、略同時的であつたと云ふこと、並びに産業が始めから比較的に高度の生産様式を採用し、従つて、産業資本の有機的機成は、爾余の自然的、地理的經濟的諸條件にも制約されて、始めから比較的に高度であり、且つ急速度に高度化せざるを得なかつたと云ふ事——これ等の二事實こそ、一方に於て、商業信用の發達を不十分ならしむることに依て商業銀行——普通銀行の活動範圍を限定し他方に於て、銀行と産業との融合又は合生の必要を交互的に緊切ならしめたのである。

今や、我が國に、産業と融合又は合生してゐない普通銀行が行たりともあるであらうか？

今爾の我が銀行界の大混亂——世界史上類例のないと云はれる——の如きは、制度上の商業銀行と産業との密接なる『融合又は合生』の有する矛盾が爆發したものであると言はなければならぬ。

(三)

氏は、次いで、言はれる。『少し省れば分るやうに、我國の對外經濟問題は、商品輸出がその殆んど全部であつて、資本輸出が問題になつたことは、かつて歐洲戰爭中資金が一時剩つて對支投資が一時的に問題となつた場合の外、殆んどないのである。』(一四頁)と。そして更に續けられる。『尤も、右に云つた言葉は、我國に資本の輸出が全然ないと云ふことではない。』

「商品輸出に代つて、資本輸出が大いなる意義を持つて來た」と云ふ事實の全然ないことを指摘したに過ぎない。所で、いま次いで、その資本の輸出について見るに、我國は資本の輸出國どころか、逆にその輸入國であることが分る。』と。

そこで、例の辻褄の合はぬ詭辯を弄して、何とかして、氏が豫め立證せんとすることに一致せしめんとしたわいもない努力を試みられる。

『なる程、第二表第三表の如く、日本の海外投資額と外國資本の日本への投資額とは畧はその總額に於て一致してゐる。しかし乍ら、我國の對外投資の中には、第二表に詳示せる如く、支那の政府及舊露國政府に對する「政治的」な投資にして且つ、その回收も利子の受領も難かしいものが八億圓近くもあり、その上、滿洲地方への投資の中には、滿鐵の如き「軍事的占領に由るものがある。が、暫く滿鐵はそのまゝとするも、己に回收の見込のない對支對露の政治貸付を除くと、……その高は約十億七千萬圓となり、之に對し同年(大正十三年)の我が外資輸入高は十八億八千萬圓餘となる。』だから、日本は資本の輸出國でなく、輸入國である』と云ふのだ。

だが、『政治的』な投資』や、『軍事的占領』に由るものは何故除かねばならぬのだ。同一筆法で行くと『我國の外資輸入現在表』の大部分を占める十五億餘の海外募集國債は、その大部分が、周知の如く、日露戰爭當時の軍事公債、即ち、滿洲の「軍事的占領」のための費用に借り入れたものではないか? これらこそ、『政治的』な投資』であり、『軍事的占領』のためのものではないか?

併し、言はれるだらう、日本は支拂能力があるが、支那政府や舊露國政府は支拂能力も意思もないからと。だが、眞の帝國主義者は、小ブルジョアジーの如く、小膽ではないのだ。目先の小利にのみ汲々とはしてゐないのだ。萬一の場合の執達吏』としての陸軍と海軍とを持つてゐると云ふ安心の上に常に、一六勝負をやつてゐるのだ。氏が『日本自身の自營のため』の『國家統一的色彩』の強い出征だと言はれる、かのシベリア出征の意義は、そしては又その後の日露交渉の意義は實にここにあつたのである。『日本自身の自營のため』と云ふことが『資本の自營のため』を意味し、『國家統一』が『金融寡頭支配の統一』を意味するのならば、寧ろ氏の卓見と逆説的ユーモアを喜ぶ。

時間と紙數がないから先を急がう。

『商品輸出に代つて、資本輸出が大いなる意義を持つて來た』一例を、氏の所謂『我が産業の大部分』を占める纖維工業中の綿絲紡績業について擧げる。

年次	同 上 増 加 率				
	(1) 内綿絲產高	(2) 内輸出	(3) 在支綿絲產高	(4) 輸出、綿布、綿絲換算高	(2),(3),(4)の合計
大正四年	一、七二〇千圓	五七三千圓	二四五千圓	二九〇千圓	一、一〇八千圓
同 一一年	二、二二八	三九一	四四二	四二九	一、二六二
同 一二年	二、一七一	二四七	六七三	四六三	一、三八三
同 一三年	二、〇七二	二六七	八一七	五四九	一、六三三
大正四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同 一一年	一三〇	六八	一八〇	一四八	一一四
同 一二年	一二六	四三	二七四	一六〇	一二五
同 一三年	一二〇	四七	三三三	一八九	一四七

右表について言ふ限り、『商品輸出に代つて資本の輸出が』如何に『大いなる意義を持つて来た』か、而も、それは、『歐州
 戰爭中資金が一時剩つて對支投資が一時的に問題になつた場合』よりも、氏が『殆んどないのである』と言はれる最近、就
 中、大正十二年以降に於て、如何に『大いなる意義を持つて来た』かを知り得るであらう。
 對支投資は、四月十二日の時事新報の報する所によれば左の如くである。

滿洲方面投資

一般投資	五四八、八六三
日支合併事業日本側投資	三四、〇〇〇
内地本社所在事業投資	三、〇〇〇〇
銀行貸付金	二八六、一九二
東拓貸付金	四一、七七二
銀行以外諸貸付金	三四、五九三
社債	二〇〇、〇〇〇
官有財産土地建物船舶	一四六、六三四
合計	一、三二二、〇〇〇

上海方面投資

紡績業	約 二〇八、二〇〇
航運業	約 五〇、〇〇〇
各種製造業	約 六六、六〇〇
其他不動産	約 二〇、八〇〇
合計	約 三四五、六〇〇

北支那方面投資

紡績業	五、八五〇
各種製造業	四、七〇〇
不動産	二四、〇五〇
合計	三四、六〇〇

漢口方面投資

紡績業	五、八〇〇
航運業	六、六六〇
各種製造業	一一、三〇〇
不動産	一一、九五〇
合計	四六、七一〇
總計	一、七四八、九一〇

右の數字には、氏の所謂「政治的」な投資は全然含まれてゐない。それに商業上の投資も殆んど含まれてゐない。のみならず、滿洲以外の地方に於ては、正金、臺銀、三井、三菱、住友等々の銀行を通じて産業に貸出されてゐる投資額が全然計上されてゐない。従つて、右投資額は、大體、工礦業運輸業等廣義の産業投資のみと見て差支へなかるべく、而して十七億

四千八百萬圓は、我が内地に於ける工礦業運輸業等の會社拂込資本金及び出資額の約三割餘に當る。さて、右投資の事業に於て、年々、少額に見償つて、投資額と等額の生産が行はれるものとしても、在支事業の年生産額は十七億餘圓に上る譯である。然るに、大正十五年に於て、我が國全輸出總額の二八%を占める對支輸出金額は四億一千三百餘萬圓にして、在支事業生産額の約四分の一弱に過ぎないのである。

にも拘はらず、氏は、『日本資本主義の現状が「商品輸出に代つて資本輸出が大いなる意義を持つて来た」と云ふことは、幾ら牽強附會しても、云ひ得ないことであることは容易に看取し得るであらう。』と見榮を切られる。だが、『政治的』投資がどうの、『軍事的占領』に由るものがどうの、『回收の見込』がどうの、と、愚にもつかぬ屁理窟を並べて、『牽強附會』するのが、果して何人であるかは、『容易に看取し得る所であらう。』

(四)

第四に、氏の『日本の資本家は殆んど、その「資本家の國際的團結」に由る「世界の分割」の埒外に取り残されてゐる』との論斷も、例に依て、極めて皮相的であり、「型」式的であり、何等具體的に分析、究明せられてゐない。そして、單に、『思ふに、そのわけは、次に述べるやうに、日本經濟の性質が、重工業的でもなく化學工業的でもない結果であらう』と、簡單に片附けられてゐる。

此の場合にも、高橋氏の『日本資本主義の解剖』の基礎知識は、全然、素朴な原則論「型」に倣つて公式論の範圍を一步も出てゐられないことを表明してゐられる。

最後に、氏は、『レーニンの第五の帝國主義的特徴は「資本主義強國間の世界の領土的分割が終結したと見得ること」と云ふのであつて、専ら、世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、従つて、こゝに問題とならないわけである。この小論の立場から問題となるのは、その「分割」の状態である、が、これについては第五節で別に述べるつもりである。』

(一七頁)と、言はれてゐる。

かくて、氏は、全く、帝國主義の何たるかを知られざるもの、如くである。氏が、特に、『第五の帝國主義的特徴』のみを指して、これは、専ら、世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、従つて、こゝに問題は起らないわけである」と、言はれるからには、氏は、帝國主義を以て、全然、一國的に孤立的な範疇として理解してゐられるもの、如くである。それでは、如何に、『日本資本主義の研究』や、『日本經濟の解剖』や、『資本主義末期の研究』をやられた所で、失禮ながら、『日本資本主義の帝國主義的地位』とかも、無産階級運動の眞の戦術、戦略も御解りにならぬ事と思ふ。

帝國主義とは、一の世界的範疇であり、國際政治過程である。故に、日本資本主義が、果して帝國主義の發展段階にまで成熟せりや否やの分析、究明は、常に、世界資本主義の現實的運動との目的連關に於てのみ考察するべきであり、かくしてのみ、日本資本主義の現實的運動の全體性的理解にまで到達し得るのである。この日本資本主義の現實的運動の全體性的理解なくしては、『我國現在の左翼戦術』の『訂正を要求する』資格はないものと云はねばならぬ。

帝國主義の特徴に關する、氏の、かゝる孤立的排他的理解こそ、氏をして、所謂『チ・帝國主義』なる鵠的範疇を獨創せしめたる所以であらう。

また、『四、帝國主義と日本經濟の性質』及『五、日本資本主義の國際的地位』の詳細なる批判が残されてゐるが、此等の點は、特に、既に包括的に、『一、及び二』の項下に於て批判し、更に、『三』に於ても必要に應じて關説したことであるから、紙數と時間とに拘束さるゝ今回は、一應これで擱筆し、後日他の機會に譲ることにしたい。——一九二七・五・五——

政界・財界の風塵

太田 正孝

諒闇の議會に心ふたがる、のは、いふまでもない。さりながら、新帝の日に新にし月に進めとの朝見の詔を、かしこみ奉りし國民は、政治の面目の改まるべきことを期してゐた。

いふまでもなく、議會は、小黨分立。政友會は政友本黨と結んで、政府に常らうとする氣配——どころか不信任案の提出——を見たので、テツキリ議會は解散となるであらうときめこんだのも無理がない。政府とても、争ふにちがひない——豫算に、緊縮方針と銘を打ちながら、その實、多分に積極の色をたゞよはせ、地方民の御機嫌をとるものと思はしめるふしん、さへあつたからである。さらに、解散となつて、國民多年の期望である普通選挙の一日も早く行はれるのを待つてゐるたからでもある。——しかるに、この國民の豫想と期待と

は、見事に裏切られてしまつた。いはゆる三黨首の會見が行はれたからである。昭和新政のはじめにあつて、どうか豫算は通してもらひたいといふ表面の口實を、若槻氏から持ち出す。——よし。議會あけの日に、深甚の考慮だにしてくれるならばと、野黨々首は、わけもなく不信任案を引こめてしまふ。つままれたのは、國民である。怒つたものもある。議會をもつて、廻れ右の體操場と心得てゐるのは、不屈千萬。うとましい世である。さなきだに議會の行藏に愛想をつかしてゐた新聞紙は、議會記事を思ひ切つてちやめてしまふ。さうかうするうちに、政府與黨と政友本黨とは、いつの間にか、政策聯盟を結ぶ。しかも、それは、互に持つてゐる手形の照合ではない。これから網み出さうとする政策の聯盟である。いふまでもなく、それは、議會中仲よく手を取り、やがて政局變るの日に於いて、政友本黨内閣を出現し、いはゆる政權の